

## 「ジャン＝ギアン・ケラスを迎えて」に寄せて

今回のKCCO定期演奏会はちょっと珍しいフレンチ・プログラム。といっても始まりはハイドンの交響曲第82番、『熊』の愛称で知られる曲だ。今回のキーワードはパリ、この交響曲もパリからの委嘱で書かれたセットの一つなのである。一度も行ったことがないのに、ハイドンはパリで大人気だった。ハイドンの殆ど全ての交響曲や弦楽四重奏曲と同じく、愛称は当時の聴衆がつけたものだ。熊、鳥、蛙、狩、校長先生…時計と軍隊だけではない。いつも思うが、昔の聴衆は想像力がなんと豊かだったのだろう。TVもインターネットもない時代、人はもっとアタマ・想像力を使って聴いていたということか。今の私達は純文学に挿絵をつけるようなことをしていないか、説明し過ぎて人の想像力を阻害していないかと、舞台上立つ側として気にしているつもりではある。

しかし今回はなんとといっても、フランスからジャン＝ギアン・ケラス氏を迎えてサン＝サーンスのチェロ協奏曲とフォーレの《エレジー》を共演するのが大きな楽しみである。

音楽をお好きな方なら、最も有名なチェロ曲『白鳥』の作曲者としてサン＝サーンスの名前はご存知だろう。あれが弾きたくてチェロを始めたという方もおられるのではないかな。なに、少々「醜いアヒルの子」だからといって卑下することはない。

今回の協奏曲、半世紀くらい前まではちょくちょく演奏会に取り上げられていたものだが、近頃は全く聞かなくなってしまった。よく聴くのは音楽高校入試か学内の試験あたりで、ということはいつもピアノ伴奏でしかなく、良くも悪くも弾くのは若者である。しかし、彼の有名なオペラ《サムソンとデリラ》とほぼ同じ時期の1872年に作曲されたもので、曲のあちこちにはオペラを彷彿とさせるオトナの雰囲気立ち込める。それこそがこの曲の魅力なのである。音楽にもやはり、ある程度歳を重ねなければできない表現というものがあるが、高校あたりの試験でそれを求めても無理な話で、そこでは専ら技巧的な部分を中心に評価することになってしまう。それはあまりにも勿体無く、曲に申し訳ない話である。もう一曲のフォーレ作品も同じく、殆どピアノ伴奏でしか聴くことがない。

そこで今回は存分に、フレンチのオトナによって味わっていただくというわけである。チェロ弾き・教育者の端くれとして言えば、チェロを勉強している人にはまたとない機会であり、万難を排してお聞きいただきたいと思う。音楽は録音だけでは解らない。

コンサート後半もいわゆる大曲ではなく素敵な小・中規模の曲を並べ、最後も静かに終わるように設定した。コンサートのプログラムをコース料理に似たものと考えたら、一皿で満腹する必要はないし、最後は記憶に残るデザートとなるものだ。フランス料理の「お味味コース」のように、気の利いた美味を少しずつという楽しみ方もまたオツなものではなかろうか。

世の中とかく、大音量で、仁王立ちのようになることが優れているかのように見られる傾向があるが、それは幾多ある価値観のうちの一つであり、それがベストではないしそれだけではつまらない。中規模だが素敵な作品がだんだん忘れ去られていくのはあまりにも惜しいではないか？世の中が大国だけでできてはいないのと同様、音楽にも様々なサイズと美的感覚があり、だからこそ美しいのである。

週末の午後、色々ご予約はあるだろうが、コンサート・ホールでフレンチな雰囲気に浸るのも悪くないはず。大倉山で皆様のお出でを心からお待ち申し上げる次第である。

